熊谷の江戸～明治 大正 昭和～〈商家のくらし〉展示

大和屋の歴史展

180年の回顧

大和屋…「大和屋」の屋号で江戸時代（文政七年）に創業、一八四年にわたり熊谷にて材木商を営む。忍藩の御用商人として地元に根付き、現在に至る。

第参弾

商家の暮らし ～明治・大正～

文化を伝える絢爛の錦絵

第三回
平成20年

6月27日㊎～7月9日㊌

会　場

街の情報発信基地（オーク北口駐車場内）

くまがや館

熊谷市筑波1-29 048-521-4625

うちわ祭り

熊谷の夏は今も昔も「うちわ祭り」。うちわ祭りは、商店がお客に配ったうちわと祇園まつりがくっついて盛んになったお祭りである。筑波区の総代をつとめる大和屋小源治も筑波の山車には当然ながら大きく関わっている。筑波区の神武天皇の山車は明治35年、鴻巣より金130円で購入したものである。こと女の長男・豊之進と筑波の若衆の努力で誕生。これ以前も以後も大和屋当主が信徒代表を務めた折、山車の改修や新築をしている。庶民にとってお祭りは華。その華を盛り上げるのは商家の旦那衆たち。この三日間は商売は二の次で、お祭りに熱中し、次の活力にそなえたようだ。

お稽古ごと

昔の庶民の楽しみは神社仏閣での催し、例えば二十三夜講であったり、お芝居や相撲見物、お稽古ごとなどいろいろであった。明治16年の高崎線の開通までは、交通手段といえば久下河岸からの早船か、籠、馬、一般には徒歩、というもので、主婦たちが遠方に出掛ける機会はほとんどなかった。

こと女には26才も年の違う妹あいがいた。次男寛之助とは1才違いで、娘のような存在で、幼少の頃からかわいがっていた。そのあいが嫁ぎ、出産したものの、産後のひだちが悪く失明。人一倍、心を痛めたこと女はあいのために家屋敷を与え、幼い頃からお稽古で身に着けていた長唄の師匠として独立させた。芸名は「杵屋六愛」といい、熊谷の町周辺の良家子女や芸者衆がここに集まり、「大和屋のおけいこ」として知られた。女性たちの華やかなサロンでもあった。

大家族制度

幕末から明治・大正・昭和の時代。なかでも明治という時代の大店は大家族制度で成り立っていた。特に食事の場は、一族が一同に顔を揃える場であった。土間の台所に続く広い板の間に銘々のお膳を並べての食事。

特に朝の食事は一日のはじめの厳粛な行事で、家長を中心に今でいうミーティングが食事のなかに組み込まれていた。特にこと女の時代は長男・豊之進、次男・寛之助、三男・蔵之助を分家させたが、日中は本家に勤め働いていた。これらの家族に加えて番頭や丁稚など、60人ちかくが朝食・昼食は本家でとるという習慣があった。

毎食60人にもなる食事の準備は大変で、2人がかかりっきりで、大かまどで五升釜で2回炊きだしていた。各人ごとにお膳、使用人は箱膳を使った。一族の団結はここで培われた。

文責・平　秀子

気丈で誇り高く生きた 黒田 こと

大河ドラマ「篤姫」は回を追ってますますの人気。江戸が風雲急を告げる同じ時を生きたのが、熊谷の大和屋女主人・黒田ことである。2代目の当主の跡取り娘であり、3代目小源治の妻として幕末から明治・大正・昭和を生き抜いた女丈夫である。篤姫が薩摩から江戸に入り、将軍家定に嫁いだ頃、初代小源治の「諸色日記帳」は頁を閉じる。こと女はまだ11才の少女だった。やがて13才で忍城に奉公、16才で養子源吉（3代目小源治）と結婚、三男三女をもうけ、3代目亡き後も大和屋の奥向きを一手に支えた。昭和12年93才で亡くなるまで誇り高く優雅に生き、商家・大和屋の「御台所」ともいうべき女性だった。熊谷は江戸時代は忍藩支配の宿場町。本陣・脇本陣のほか17もの旅籠が軒を並べていた。維新後、熊谷は明治4年に「熊谷県」となり、3年2ヶ月の間、県庁所在地として隆盛を極める。中山道と舟運をつなぐ荒川河岸も賑わい、特に筏は万吉河岸、早船は久下河岸、塩や油、米、肥料などの荷は新川・江川河岸で取引された。中山道・本町の問屋場も賑わった。今も大和屋の庭に残る大きなめがね石は明治13年、新川河岸で取引され、2代目小源治所有となったものである。

展示会場には明治から大正にかけて大和屋に伝わる商家の暮らしぶりがしのばれる道具や錦絵を展示。写真は赤ちゃんのおくい初めのお膳・結婚式に使われる三々九度セット、お祝いに使われた牡丹絵の五段重箱。又、蔵に保存されていた錦絵（写真上・下段）も一挙大公開。